第58回

出雲岩谷の会

地唄　鐘ケ岬　出雲　礼

演奏　川瀬露秋
大坪正秋

幕間座談　舞と踊と

舞踊評論家　丸茂祐佳
芸能史研究家　田中英機

地唄　古道成寺　出雲　蓉

演奏　藤井泰和

地唄　鐘ケ岬

〽鐘に怨みは数々ござる　初夜の鐘をつく時は　諸行無常とひびくなり　後夜の鐘をつく時は　是生滅法とひびくなり　晨朝の響きには生滅々為　入相は寂滅為楽とひびけども聞いて驚く人も無し　われは五障の雲晴れて　真如の月を眺め明かさん

〽言わず語らず我が心　乱れし髪の乱るるも　情ないは只移り気な　どうでも男は悪性な　桜々とうたわれて言うて袂にわけ二つ　勤めさへただうかうかと　どうでも女子は悪性な　吾妻そだちは蓮葉な者じやえ

〽恋の分け里　数え数えりや　武士も道具を伏編笠で張りと意気地の吉原　花の都は歌で和らぐ敷島原の勤めする身は誰と伏見の墨染　煩悩菩提の撞木町より浪花四筋に通い木辻の　禿立から室の早咲き　それがほんに色じゃ　一い二う三い四　夜露雪の日　下の関路を　共にこの身を馴染かさねて　中は円山ただまるかれと　思い染めたが縁じやえ

地唄　古道成寺

〽昔昔この所に　まなごの荘司といふ者あり　かの者ひとりの娘を持つ　またその頃　奥よりも　熊野へ通る山伏あり　荘司がもとを宿と定め　年月送る　荘司娘寵愛のあまりにて　あの客僧こそ　汝が夫よ夫と　戯れしをば　幼心に真実と思ひ　明かし暮して　おはしける

〽その後娘　夜更け人も静まりて　衣紋つくろひ鬢かき撫でて　忍ぶ夜の障りは　冴えた月影　更けゆく鳥鐘　それに嫌なは犬の声　ぞっとした　人目忍ぶの　憂や辛や　せき来る胸を押し鎮め　かの客僧の傍へ行き　いつまでかくて置き給ふ　早く迎へて給はれと　じっと締むれば　せん方なくも客僧は　縒れつ縺れつ常陸帯　二重回りは三四重五重　七巻まいて　放ちはせじとひき結ぶ　切るに切られぬ　我が思ひ　お馬繋ぐはそりや嘘つきよ　とても寝ようならはて諸共に　縁は朝顔浅くと儘よ　せめて一夜は寝て語ろ　後程忍び申すべし　娘真実と喜びて　一間の内にぞ待ちいたる

〽その後客僧　しすましたりと　それよりも　夜半に紛れて　逃げて行く　幸ひ寺を頼みつつ　しばらく息を継ぎゐたる

〽所へ娘かけ来たり　エエ腹立ちや腹立ちや　我れを捨て置き給ふかや　ノウノウいかに御僧よ　いづくまでも追っかけ行かん　死なば諸共二世三世がけ　逃すまじとて追っかくる

〽折りふし日高川の水嵩増さりて　渡るべきもあらざれば川の上下彼方此方と　走り行きしが毒蛇となって　川へざんぶと飛び込んだり　逆巻く水に浮いつ沈みつ　紅の舌を巻きたて　炎を吹きかけ吹きかけ　なんなく大河は泳ぎ越し　男を返せ戻せよと　此処の面廊彼処の客殿くるくるくるくる　くるりくるくるくるくるくる　追ひ巡り追ひ巡り

〽なほなほ怨霊　威丈高に飛び上がり　土を穿って尋ねゐる　住持も今はせん方なく　釣鐘下ろして隠し置く　尋ねかねつつ怨霊は鐘の下りしを怪しみ　龍頭を銜へ七巻きまいて　尾をもって叩けば　鐘はすなはち湯となって　遂に山伏取り終ぬ　なんぼう恐ろし物語